

世界初ガラスのヴァイオリン ～^{は り お}玻璃王ヴァイオリン～の誕生

ハリオグラス株式会社

辻 本 真 理

The First Violin in The World Made by Glass Material

Mari Tsujimoto

HARIO GLASS CO., LTD.

プロローグ

それは、2003年春、ある出会いがきっかけとなった。ヴァイオリニストであり作曲家でもある川井郁子さんと、弊社がイメージキャラクター契約をかわしたことである。耐熱ガラスの製造と音楽そのものは直接は関係がないが、社会貢献の一環として、若い音楽家の演奏会を支援している背景があった。しかし今振り返ると、誰がガラスヴァイオリンの制作を手掛けるまでに発展すると思ったであろうか。

幸運なことに、ガラスのヴァイオリン「玻璃王ヴァイオリン」の誕生を傍らで見る事ができた私が、その軌跡の一部を記させていただく。

夢のプロジェクト

「今日は川井さんとこれから、ハリオグラスとどう関わってもらおうか、ミーティングを開く」と弊社社長である柴田から告げられた。広報担当である私は、ミーティングの末席にいた。

〒103-0006 東京都中央区日本橋富沢町 9-3
TEL 03-5614-2110
FAX 03-5614-2126
E-mail: mari@hario.com

耐熱ガラスについてやハリオグラスの歴史等ひと通り話した後、先日おこなわれた川井さんのコンサートやCDの感想などが、和やかな雰囲気の中語られた。

「ところで川井さんの持つガラスの印象は？ガラスは好きですか」

「ええ。ガラスはキラキラしていて、綺麗ですね。眺めるのは好きです」

「それは良かった。眺めるだけでなくガラスと川井さんを結びつけるものはないか……。そうだ、閃いた。ガラスのヴァイオリンがあれば弾いてみたいですか」

「ええぜひ。どんな音がするのかしら」思いもよらない柴田の言葉に川井さんの目が輝いたように感じた。

時として大胆な発想をするのが、経営者たるものなのだ。夢のあるプロジェクトは、柴田の閃きにより誕生したのであった。ただ、この時、ガラス製のヴァイオリンが作れるのか、そして音が鳴るのか、誰にもわからなかったのは確かである。

アレコレ悩む前にまずやってみよう、の精神で早速ガラスのヴァイオリン製作のプロジェクトが発足した。

企画担当，工場長以下，金型設計や手吹き，加工といった各分野の熟練の技術者が集められた。一同，内容を告げられると，それは面白いと思う一方，果たして作れるのか，構造はどうするのか，強度はどうか，立ちはだかる問題の多さを感じずにはいられなかったと，後に聞いた。だが一方で，未知への挑戦，しかも世界で初めてのガラスのヴァイオリンの製作に成功し，音楽が奏でられるとするならば，この夢のあるプロジェクトに対して，職人，技術者の魂に火がついたのも事実であった。これは大変なことだ。だが，成功させねば。皆の思いはひとつになったのだ。

最初に考えられたことは，ヴァイオリンのボディ（本体）の部分をガラスにする。しかもプレスではなく，ブロー成形であり手吹きでかつ停止吹き技法により製作すること。それ以外の糸巻きの部分やヴァイオリンの弦を押さえる箇所/指板はアクリルで作ることになった。さらに，飾り物でなく，実際に演奏ができるもの，木製のヴァイオリンとは別の新しい音作りをおこなう，ということまで考えられた。

家庭用品や理化学，自動車のヘッドレンズといった耐熱ガラス製造のプロであっても楽器づくりの経験者は誰もいない。正確にヴァイオリンの構造を知るために何台もヴァイオリンが購入され，解体された。

第一の関門は，ヴァイオリンの本体であるボディの成形であった。ヴァイオリンの柔らかな曲線を出すために，手吹きでかつ停止吹きの技法での製作としたが，形ができて音も鳴らすためには，ガラスの厚さを薄くかつ均一に吹かなければならないという，2重の難しさがあった。

金型の設計においては，ヴァイオリンのS字型の曲線および，エッジを出して，ヴァイオリンらしさのフォルム作りをおこなう一方，ガラスを吹いたあと，型から外しやすいか等何度も検証がされた。

工場の現場で，吹いている様子を見たが，型



から外すと吹き竿の先にヴァイオリンの形ができてきているのは，同じ社員でありながら，これこそ技だと感動したことを今でも覚えている。

第二の関門は，演奏の際どのくらいの力がかかってくるのか，そしてそれに耐えられるものが作れるかであった。木製のヴァイオリンと同じ指板の図面を起こし，アクリルで作る，弦の張りに対する強度が保たれるようにした。このあたりは，ガラスと他の素材を組み合わせる，家庭用品を作っている知識が役に立ったかもしれない。

何台ものボディを吹いては壊しの動作が繰り返された。その中でガラスの厚みがより均一なものが最終的に2台選ばれた。厚さは木製のヴァイオリンと同じ数値にまでなっていた。

次のステップは加工であった。ひとつひとつ職人の手により，成形時にできた余分な竿の箇所の切断がされ，F字穴を空け，さらにヴァイオリンに華をそえるべくグラビール加飾，ペインティングが施された。各行程とも，熟練者により加工が施されたのだが，いかんせん最終行程までたどりつける可能性のあるボディは2台しかない中での作業であった為，さぞ気を使ったことと思われる。

最後にアクリル製の指板がボディに貼られ，糸を張り調弦し完成となる。調弦の途中，ガラスのヴァイオリンの奏者となる川井さんが音を出せる状況になったので，チェックをお願いした。現場に現れた川井さんは，何のためらいも

なく、ガラスのヴァイオリンを手に取り、さらりと音を奏でた。構想から約半年、ガラスのヴァイオリンが産声をあげたのだ。

玻璃王ヴァイオリンの誕生

玻璃王ヴァイオリンの玻璃王とは。玻璃とはガラスの意味で、玻璃王はガラスの王様のことである。ちなみに弊社のブランド HARIO もハリオガラスの社名もガラスの王様から由来している。

2003年12月1日。日本橋の本社ビル1階のホールで、ガラスのヴァイオリン「玻璃王ヴァイオリン」製作関係者へのお披露目がなされた。演奏者は川井さん。その日は、「玻璃王ヴァイオリン」の音色と、ガラスの持つ透明感とピュアなイメージにあった川井さん作曲の楽曲も演奏された。

初めて耳にする「玻璃王ヴァイオリン」の音色は、木製のヴァイオリンとは違った、心にしみ入るような、どこか懐かしい音色であった。川井さん作曲による、「玻璃王ヴァイオリン」のための楽曲は、「白い大地～White Sand～」と名付けられた。これは「玻璃王ヴァイオリン」の素材である耐熱ガラスが、ホワイトサンドつまり純粋な白い砂から生まれたピュアな物であり、それは地球の贈り物であることを意味している。

この段階ではまだ内々での発表ではあったが、この日「玻璃王ヴァイオリン」が鳴ってほっとした、と胸をなで下ろした者や、感無量だと感激した者、郷愁をさそう音色だと感想を言う者。製作に直接関わった者も、そうでない者も今迄にない試みの成功に湧いていた。

12月9日には、世界初のガラスのヴァイオリン「玻璃王ヴァイオリン」誕生の記者発表が行われ、その夜、得意先や協力会社の方を招いて、プライベートコンサートを開き皆様に正式に発表を行うに至った。

「玻璃王ヴァイオリン」の評判は我々が思っ



た以上に広まっており、耐熱ガラスメーカーというよりも、ガラスのヴァイオリンを作ったメーカーと認識されている方もおり、驚いている。

今回ガラスのヴァイオリンを製作した意図は、楽器の商売を目指したわけでもなく、耐熱ガラスメーカーとして新しい加工技術へのチャレンジとして、未知の領域であるヴァイオリン製作にチャレンジをしたのである。本業ではない分野、どちらかといえば遊びの要素があることにトライするケースを、大企業の話として時折耳にする。今回、ガラスヴァイオリン製作にチャレンジし、加工の行いやすい特性を持つ耐熱ガラスの新たな可能性を見出すことができた。と同時に、物作りを行う企業として、重要な要素のひとつである、一見本業とは関係がないようなことも追求していく姿勢と余裕が持てたという点においても、手前味噌ではあるが、企業としての器が大きくなったのだと一社員として感慨深く思った出来事であった。